

あ ま の あさ ぶ
亜麻の 麻生
まち

れき し
亜麻工場の歴史





目次



だい しょう	れき し つた	第①章	歴史を伝えるアカマツ	1
	あさぶちよう たんじよう	第②章	麻生町の誕生	3
	ていこく せい ま こと に あ ま こうじよう	第③章	帝国製麻琴似亜麻工場の歴史	6
	あ ま さんぎよう せいすい	第④章	亜麻産業の盛衰※	12
		第⑤章	まちの歴史を伝える	15



まだ人家もまばらだったころの麻生の町に、明治から昭和にかけて植物の
亜麻をあつかう大きな工場（亜麻工場）がありました。工場は、働く人たちの
生活を支えました。工場がなくなると、そのあと地（工場があった場所）
にはたくさんの家が建ちました。町に住む人々が増え、商店街がにぎわい、
地下鉄の駅もできました。

麻生の町が発展するいしずえ※となった亜麻工場とはどんなところだった
のでしょうか。その歴史をふり振り返りながら、亜麻工場が町に何をのこし、今
に何を伝えているかを考えてみましょう。



あ ま 亜麻って何？

亜麻は、くきの高さが40センチメートルから1メートル
くらい植物で、くきからは天然のせんい（糸の原料
になるもの）を、種からは油を取ることができます。初
夏から夏にかけて青紫色又は白色の花を咲かせ、最近で
は花を見て楽しむために育てられることも増えています。



▲亜麻の花



むずかしいことば

※盛衰 ものごとのいきおいがさかんになることと、おとろえること。

※いしずえ ものごとの大もと。

第1章 歴史を伝えるアカマツ

ここは札幌市北区麻生町3丁目。道路の真ん中に、大きなアカマツが立っています。高さは約10メートルあり、樹れい（木の年れい）はなんと150歳以上だそうです。幹の直径は60センチメートルあり、大きな大人の人がやっと手を回せるくらいの太さです。大きなアカマツはゆるやかにローマ字の「S」の字のような形をえがきながら空に向かってのびています。どうしてこんなに大きくて立派なアカマツが道路の真ん中に生えているのでしょうか。



▲道路の真ん中のアカマツ

むかし、麻生には、植物の亜麻をあつかう大きな工場がありました。その工場の名前は、「帝国製麻琴似亜麻工場」といい、農作物として育てられた亜麻のくきからせんい（糸の原料になるもの）を取り出す仕事をしていました。

せんいって何？

糸の原料になるととても細いもののことです。植物のくきや動物の毛などから取れる天然のもの（天然せんい）と、石油などをもとに人工的に作られるもの（化学せんい）とがあります。せんいをより合わせて糸が作られ、さらに糸を縦横に組み合わせて衣服などの織物（布）が作られます。



▲亜麻のくきから取り出したせんい

工場には、仕事をするための建物だけでなく、工場で働く人たちが住む家など多くの建物があり、とても広いしき地※がありました。実は、この大きなアカマツは、工場長の家の前に植えられていました。



ていこくせいまいことにあまこうじょうようす
▲帝国製麻琴似亜麻工場の様子



▲工場長の家の前に植えられていた
ころのアカマツ

しかし、この工場は、1957（昭和 32）年に閉鎖※されてしまいます。工場の建物はすべて取りこわされ、工場のあと地には団地※（麻生団地）が作られて、人々が住むための新しい家がたくさん建てられました。

でも、この大きなアカマツだけは同じ場所に残ったのです。「道を通るのにじゃまだから」と切られそうになったり、別の場所に移されそうになったりしたこともありましたが、



▲工場のあと地に作られた麻生団地

町の人たちで話し合い、この地域の歴史を伝える遺産※として未来に残していこうということになったのです。

第2章 「麻生町」の誕生

今の麻生町を空から見てみましょう。3

本の太い道路（新琴似四番通、琴似栄町通、石狩街道）で囲まれた直角三角形のような形をしています。

麻生町のとなりに、「新琴似」という地名があります。現在の麻生町は、もともと「新琴似」という地名で呼ばれていた地域の一部でした。「新琴似」から三角形に区分けされた地域が新たに「麻生町」と名付けられ

たのです。その理由は、むかしここに帝国製麻琴似亜麻工場が存在していた歴史と深く関わっています。

帝国製麻琴似亜麻工場が1957（昭和32）年に閉鎖されると、工場のあと地はとても大きな団地を作るための場所選ばれました。工場の建物はすべて取りこわされて、工場があったことがわかるものはなくなってしまいました。



▲空からみた今の麻生町
(2016（平成28）年札幌市撮影)

？ むずかしいことば

- ※しき地 建物などを建てるために使われる土地。
- ※閉鎖 働きをやめること。
- ※団地 住宅（人々が住む家）を一か所に集めて作った所。
- ※遺産 むかしの人が残した大事なものの。



国土地理院ウェブサイト「地図・空中写真閲覧サービス」からダウンロードした米軍撮影の空中写真を加工して使用

▲空から見た帝国製麻琴似亜麻工場
(赤わく内・1948（昭和23）年撮影）



国土地理院ウェブサイト「地図・空中写真閲覧サービス」からダウンロードした国土地理院撮影の空中写真を使用

▲団地が作られ住宅が立ち並ぶ工場あと
地の様子（1961（昭和36）年撮影）

工場があったことは年月が経つにつれて忘れられてしまう運命にあったかもしれません。しかし、最後の工場長を務めた黒川修策さんは、そうなっ
てほしくない、この場所に亜麻工場が存在した歴史を地名にこめて残したいと考えました。黒川さんは、工場あと地一帯の区域に「亜麻」の「麻」の字をふくむ「麻生」という地名をつけて、亜麻工場があった歴史を残そうと、この考えに賛成する人々の署名※を集めました。



▲最後の工場長を務めた
黒川修策さん

そして、920 人の署名が集まり、工場が閉鎖された次の年の 1958（昭和 33）年 8 月に、札幌市の議会※に「麻生町」という新しい地名をつけることをお願いする文書（せい願書）が、920 人の署名とともに提出されました。これを受けた札幌市の議会は、このせい願書を受け入れることを決定し、1959（昭和 34）年 4 月 1 日には正式に「札幌市麻生町」という地名が誕生しました。

せい願書に書かれていること

札幌市の議会に提出されたせい願書の理由には、次のようなことが書かれています。
 「新琴似に屯田兵※が開拓※のために移り住んだのは、1887（明治 20）年のことです。移り住んだ人々が国からももらえるお金がなくなって困っていたころ、亜麻工場ができました。新琴似の人々にとって亜麻工場は高い給料をもらって働くことのできる場所となり、栽培※した亜麻のくきや種を工場に売ることによって多くのお金を得ることができました。長い歴史をもつ工場があった場所に家がたくさん建てられようとしている今、麻の字がついた地名をつけ、この場所が日本の国で亜麻の仕事が始まった場所であることを将来に残したいと願っています。」

「麻生町」という地名には、新琴似の開拓に入った人々の暮らしを、亜麻工場が長く支えた歴史もこめられているのです。



? むずかしいことば

- ※署名 書類などに自分の名前を書き記すこと。
- ※議会 市民から選ばれた人々が、社会の決まりごとなどについて話し合い、取り決めをする所。
- ※屯田兵 明治時代に、北海道の開拓と守りに当たった人々。ふだんは戦争に備えた訓練をしながら農業を行い、戦争があれば兵士となった。
- ※開拓 森林や原野を切り開いて田畑や家、道などを作ること。
- ※栽培 草花や木、野菜などを植えて育てること。

第3章 帝国製麻琴似亜麻工場の歴史

「麻生町」という地名の由来となった亜麻工場は、どんな工場だったのでしょうか。

【北海道で2番目の亜麻工場】

明治時代になると、北海道では、森林や原野を切り開いて畑や家、道などを作る開拓が進められました。こうして新たに切り開かれた土地では、北海道の気候にあった農作物が育てられるようになりました。



その中の一つに、すずしい気候でよく育つ「亜麻」がありました。北海道のすずしい気候を生かして亜麻を育て、そのくきからせんいを取り出して糸や布製品を作ることで、北海道に新しい産業※をおこすことができると考えられたのです。

こうして、1887（明治 20）年、北海道で亜麻に関する仕事を行うための
会社が作られました。1890（明治 23）年 6 月には、札幌郡琴似村新琴似（現
在の札幌市北区麻生町）で、この会社によって北海道製麻琴似製線所の建設が
始まり、翌 1891（明治 24）年 8 月に完成して作業を始めました。

これは、亜麻のくきからせんいを取り出す仕事をする工場で、北海道で
2 番目にできた亜麻工場でした。この工場は、後に帝国製麻琴似亜麻工場
と名前を変え、1957（昭和 32）年 10 月に閉鎖されるまで 66 年間作業が
続けられました。



▲工場^{ちゅうしんぶ}の中心部^{ようす}の様子



▲工場^{ちゅうしんぶ}の中心部^{ようす}から南の方角を見た様子



▲工場^{そうこ}内の倉庫の様子

? むずかしいことば

※産業 人間の生活に必要な物を作り出す、いろいろな仕事。

【亜麻工場の仕事】

亜麻は、工場との約束に基づいて農家が栽培しました。収穫後に工場に運びこまれた亜麻のくきは、小分けに束ねられ、池や土の中に作られたタンクで水に浸します。これは、くきのせんいを取り囲んでいる部分を水の中でくさらせることによって分解し、せんいを取り出しやすくするためです。



▲亜麻の収穫の様子

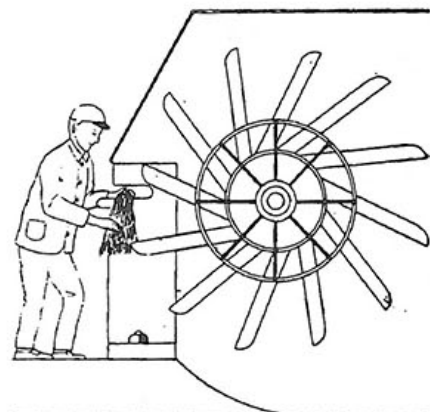


▲くきを水に浸している様子



▲水に浸したくきを乾燥させている様子

次に、水に浸したくきを乾燥させ、機械を使ってせんいを取り出します。機械でくさいせんいを取り出しやすい状態にしたくきを手に持ち、「ムーラン」という機械の回転する羽根にぶつけ、せんいを取り囲んでいる部分をたたき落としてせんいを取り出しました。



▲「ムーラン」の絵

(出典) 原松次著

「北海道における亜麻事業の歴史」



亜麻工場の仕事はここまでで、取り
出されたせんいは現在の札幌市東区北
7条東1丁目のあたりにあった製品工
場（帝国製麻札幌工場）に運ばれ、糸
や布製品に加工されて全国に出荷され
ました。



▲帝国製麻札幌工場
(出典)「帝国製麻株式会社三十年史」巻頭頁

【亜麻工場の生活】

琴似亜麻工場のしき地は、全体で約 28 ヘクタール（札幌ドーム約 5 個分）
の広さがありました。工場のしき地内には、仕事をするための建物のほかに、
工場で働く人たち（従業員）
やその家族の住む家（従業員
住宅）や、日用品を売ってい
る店、浴場（ふろ場）、保育所、
神社（マコト神社）などがあ
り、工場で働く人たちとその
家族の生活の場にもなってい
ました。



▲工場の 60 周年を記念して 1950（昭和 25）年
に撮影された従業員とその家族の集合写真

両親が琴似亜麻工場に働いていた大波和美さん（1940（昭和 15）年生まれ、
札幌市北区在住）が工場内の住宅で暮らしていた子ども時代の思い出を話して
くれました。

「工場内の住宅は、5軒一続きの長
 屋※で、近くに住む人とは親しく暮
 らしていました。行事もたくさん
 あって、6月には工場内にあったグ
 ラウンドで工場で働く人たちとその



▲工場の思い出を話す大波和美さん

家族の運動会が行われていました。8月にはみんなで石狩浜へ海水浴に行き
 ました。秋には演芸会が開かれ、工場の中でも芸が上手な人たちが歌や劇を
 見せてくれました。生活に必要なものは工場に何でもそろっていました。」



▼▲工場内に建てられていた住宅



▲工場内のグラウンドで行われていた運動会



▶工場内にあったマコト神社



？むずかしいことば

※長屋 たてもの 細長い建物をいくつか区切ってそれぞれ一軒として住めるようにした家。

しょうわ ことにあまこうじょう
1950(昭和25)年ごろの琴似亜麻工場



・イラスト作成：札幌市立大学デザイン学部2年 佐野弥詩さん・佐野明夏さん

あさひぶちよう
今の麻生町



第4章 亜麻産業の盛衰※

琴似亜麻工場と同じように亜麻のくきからせんいを取り出す仕事をする工場は、北海道内の各地に建てられました。その数は、合計で 85 か所にもなりました。北海道のすずしい気候にあった亜麻を育て、収かくされたくきからせんいを取り出して糸や布製品を作る仕事は、北海道の重要な産業となっていたのです。

ところが、琴似亜麻工場は 1957（昭和 32）年 10 月に

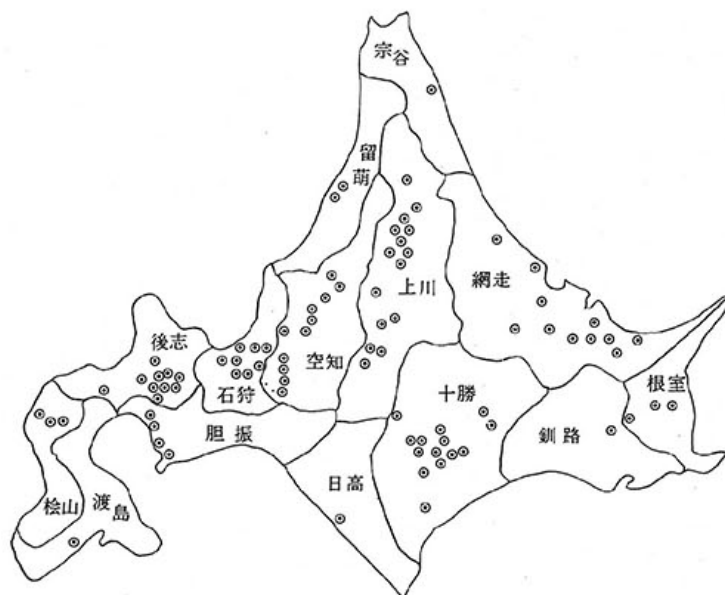
閉鎖され 66 年の歴史を閉じ

ます。そして、北海道内の各

地に建てられた亜麻工場は、1970（昭和 45）年に最後まで残っていた十勝地方の音更工場が閉鎖され、すべて無くなってしまいました。

北海道でさかんになった亜麻産業が、無くなってしまったのはなぜでしょうか。

▼北海道内に建てられた亜麻工場の位置を示した地図



（出典）原松次著「北海道における亜麻事業の歴史」6 頁

? むずかしいことば

※盛衰 ものごとのいきおいがさかんになることと、おとろえること。

※軍服 軍人が着る制服。

【終戦と亜麻産業】

亜麻のせんいをもとに作られる織物（布）は、丈夫で長持ちする性質があります。丈夫なので、軍服※やテントなどを作るのにとっても便利でした。明治時代に北海道で亜麻産業が始まってから、日本は大きな戦争を繰り返しました。そこで、戦争で使う軍服やテントなどの布製品を作るために、たくさんの亜麻を育て、たくさんの亜麻のせんいが必要だったのです。

しかし、1945（昭和 20）年に戦争に敗れた日本は、平和な国づくりを進めることになりました。戦争後、日本は食料不足になったため、国は、食料になる農作物を育てることを優先することにしました。そのため、亜麻を栽培する農家は少なくなっていき、北海道内の亜麻工場は、原料となる亜麻のくきを十分に確保することが難しくなっていました。



亜麻のせんいで作られた製品のいろいろ



▲テント



▲消火用ホース



▲衣服（リネン服）



▲ハンカチ

（出典）テント：美幌町役場「美幌の亜麻工場」171 頁、消火用ホース・ハンカチ：帝国製麻株式会社「日本の製麻業」28 頁以下、衣服：帝国製麻株式会社「帝国製麻株式会社三十年史」巻頭頁

【化学せんいの登場と亜麻産業】

1945（昭和 20）年の終戦とともに、亜麻産業に関わる仕事をしていた人たちは、これからは人々の平和な生活に役立つ製品を作ろうと決めました。ところが、その後、糸や布製品の原料となるせんいとして、石油などを原料として人工的に作られる化学せんいが急速に広まりました。化学せんいは、亜麻のせんいと比べて価格が安く、亜麻のせんいが使われていた消火用ホースなどでも化学せんいが使われるようになり、亜麻のせんいが必要とされることは少なくなっていました。

亜麻を栽培する農家が少なくなると、原料となる亜麻のくきを確保することが難しくなったことと、化学せんいが広まってきたことが重なって、亜麻産業に関わる仕事を続けることが難しくなってしまったのです。

リネンの歴史と文化

亜麻のせんいは、人類が織物の原料として利用したもっとも古いせんいといわれており、古代エジプトでミイラを包んだ布にも亜麻のせんいが使われています。

世界に目を向けると、亜麻は今も多くの国々で栽培されています。



▲古代エジプトの壁画にえがかれた亜麻の収かくの様子
（出典）「帝国製麻株式会社三十年史」207 頁

ヨーロッパでは、亜麻のせんいを原料に作られた布製品（英語では「リネン」といいます）は、すぐれた性質がある織物として人々の生活に取り入れられ、文化として受けつがれています。肌触りがよく、水をよく吸収して乾きやすい性質があり、洗たくにも強い丈夫さが人々に支持されている理由で、特にシーツやバスタオル、テーブルクロスなどの材料として人気があります。

ぼくの包帯も
亜麻のせんいで
つくられたんだヨ



第5章 まちの歴史を伝える

地域の歴史に関わることを、その地域ならではの大切なものとして将来に伝え、まちづくりに活用していこうという取り組みは全国で行われています。ここでは、人々の交流の輪が育まれ、地域に対する愛着※を持ちながら心豊かに暮らすためのさまざまな活動が生まれます。

麻生町も例外ではありません。1983（昭和58）年に、麻生商店街の人たちが、まちの名前の由来である亜麻の栽培に初めて取り組みました。2011（平成23）年には、亜麻を通して人々の交流のきっかけづくりをしようと、亜麻を愛する地域の人たちにより、「あさぶ亜麻保存会」が作られました。地域で活動する様々



な団体と協力しながら、亜麻工場の歴史を伝える活動をしています。

道路脇や公園の花壇などに亜麻を植えて、まちを亜麻の花で彩ろうという活



▲小学校での授業の様子

動もその一つです。毎年初夏から夏にかけて青紫色の花が人々の目を楽しませています。このほか、植えて育てた亜麻のくきからせんいを取り出して糸や織物を作る体験会を開催したり、小学校や中学校で麻生と亜麻の歴史に関する授業を行うなど、幅広く活動しています。

? むずかしいことば

※愛着 心を引かれ、大切に感じること。

あ ま と たいけんかい よう す
亜麻のくきからせんいを取り出して糸を作る体験会の様子



しゅう かんそう
収穫したくきを干して乾燥させます



くきを水に浸してくさらせ、
再び干して乾燥させます



くきをくぐいでせんいを
取り回している部分を
取り除きます



糸車をつか
糸車を使いせんいを
より合わせて糸を作ります



取り出されたせんい



ブラシですいてせんいを
取り出します

ふっかつ きいばい とうべつちよう
復活した亜麻栽培—当別町

しんことにえき やく めいじ しょうわ はじ
JR 新琴似駅から電車で約 30 分の当別町にも明治から昭和の初めにかけて亜麻工場が
ありました。亜麻工場が次々と閉鎖され
て、北海道で農作物として亜麻が育てら
れることはなくなっていました。当別
町では、亜麻仁油（亜麻の種から取れる油）
を作ることを目的として、再び農作物と
して亜麻が栽培されるようになりました。
畑に植えられた亜麻の花が見ごろとな
る 7 月には毎年「亜麻まつり」が開催され、
多くの人が訪れています。



▲亜麻の花を楽しむ亜麻まつりを訪れた人々
（写真提供：（有）亜麻公社）



ねん びょう 年 表

1887 (明治 20) 年	しんことに とんでんへい かいたく うつ す 新琴似に屯田兵が開拓のために移り住む
1891 (明治 24) 年	ほっかいどうせいま こと にせいせんじょ かんせい さぎょう はじ 北海道製麻琴似製線所が完成し作業を始める
1940 (昭和 15) 年	めいしょう ていこくせいま こと に あまこうじょう あらた 工場の名称が帝国製麻琴似亜麻工場と改められる
1945 (昭和 20) 年	たいへいようせんそう やぶ 日本が太平洋戦争に敗れる
1957 (昭和 32) 年	へいさ 帝国製麻琴似亜麻工場が閉鎖される
1959 (昭和 34) 年	いったい く いき あさぶちょう 帝国製麻琴似亜麻工場のあと地一帯の区域が「麻生町」と名付けられる
1961 (昭和 36) 年	だんち 帝国製麻琴似亜麻工場のあと地に作られた「麻生団地」が完成する
1970 (昭和 45) 年	た な 北海道に建てられた亜麻工場がすべて無くなる
1983 (昭和 58) 年	しょうてんがい さいばい と く 麻生商店街の人たちが亜麻栽培の取り組みを始める
2002 (平成 14) 年	どうべつちょう のうさくぶつ ふっかつ 当別町で農作物としての亜麻の栽培が復活する
2011 (平成 23) 年	ほ ぞんかい 「あさぶ亜麻保存会」が作られる





●編集に協力していただいた方々●

あさひ亜麻保存会 会長 宮崎 正晴さん
 あさひ亜麻保存会 事務局長 喜多 洋子さん
 あさひ亜麻保存会 理事 永倉 吉裕さん
 元新聞記者 山田 寿彦さん（原稿執筆）
 札幌市立和光小学校の先生方
 札幌エルプラザ公共4施設

●取材に協力していただいた方々●

大波 和美さん 黒川 弘基さん 水越 昌吾さん

●写真を提供していただいた方々●

永倉 吉裕さん あさひ亜麻保存会
 麻生商店街振興組合 (有) 亜麻公社

●参考文献等●

「帝国製麻株式会社三十年史」 帝国製麻株式会社
 「帝国製麻株式会社五十年史」 帝国製麻株式会社
 「日本の製麻業」 帝国製麻株式会社
 「北海道亜麻事業七拾周年記念史」 北海道亜麻事業七拾周年記念会
 「北海道における亜麻事業の歴史」 原松次著
 「美幌叢書 第十三号 美幌の亜麻工場」 美幌町役場
 「麻生のあゆみ」 麻生連合町内会
 「新琴似七十年史」 新琴似開基七十年記念協賛会
 「新琴似百年史」 新琴似開基百年記念協賛会
 帝国繊維株式会社ホームページ
 日本麻紡績協会ホームページ

●企画・制作●

札幌市北区市民部地域振興課

〒001-8612 札幌市北区北 24 条西 6 丁目

TEL (011) 757-2407

FAX (011) 747-5898

平成 31 年（2019 年）3 月発行

SAPP
RO



さっぽろ市
01-001-16-2621
30-1-196